

第5回 市民動物園会議

会 議 録

第5回 市民動物園会議

- 1 日 時 平成20年12月11日(木) 14:00から16:00
- 2 場 所 円山動物園内 動物園プラザ
- 3 出席者 委 員：原田 昭、いがらし ゆみこ、井上 剛
太田 富士栄、鈴木 美佐子、須藤 深雪
服部 信吾、林 健嗣、原 はるみ
(欠席) なし

事務局：環境局理事、円山動物園園長、飼育展示課長 ほか

4 議 事

(1) 近況報告

- ア イベント等
- イ 入園者数及び入園料収入状況
- ウ アニマルファミリー会員登録状況・関連イベント
- エ 歳入歳出状況

(2) 円山動物園へのゾウの導入について

(3) 委員からの提案・意見交換

(4) 次回議題と日程調整

(5) その他

1. 開 会

○金澤園長 それでは、定刻となりましたので、これから第5回市民動物園会議を開催させていただきますと思います。

それでは、委員長の方から、ひとつお願いしたいと思います。

2. 議 事

○原田委員長 それでは、きょうは第5回ということですが、今年最後の市民動物園会議です。

それでは、早速、議事に入りたいと思います。

その前に、委員の出席の確認をお願いします。

○金澤園長 出席委員は、全員出席の予定なのですが、いがらし委員がちょっと遅れて、その辺まで走ってきていると思います。ちょっと遅れると思いますが、全員出席でございます。

○原田委員長 それでは、議事の1番目の近況報告を、動物園側からお願いしたいと思います。

○金澤園長 その前に資料の確認ですが、先日、何種類もの資料をお送りさせていただきましたが、今日お持ちでない方はおられますか。もしなければ用意しております。

それでは、資料につきまして説明させていただきたいと思います。

まず、近況報告を資料2に基づいてさせていただきたいと思います。

前回、開きました以降の部分をここにまとめてございます。前回は7月末ぐらいまでの内容で報告させていただいておりますので、その後ということになります。

項目の整理は、基本計画に基づいて整理しておりますので、ちょっと日にちとかは時系列的に並んでおりませんので、そこはご容赦願いたいと思います。

まず、資料2-1、円山動物園の役割と行動指針に沿ったものでございます。この中で何点かピックアップしますが、10月14日に講演ということで、オオカミその生態と生態系での役割ということで、エゾシカ・オオカミ舎でオオカミの飼育、研究にかかわっております桑原さんをお招きして開催してございます。

それから、同じ10月ですが、18、19日に、これは動物園も取り組んでおりますが、野生復帰プログラム関連で、ザリガニを通じて身近な環境問題を考えよう、それから提案していこうということを目的としたシンポジウムでございます。「ザリガニシンポジウム in MARUYAMA」ということで、環境省、開発局、酪農大学などザリガニの研究者で構成していますザリガニ実行委員会というものがあまして、その方々と共同開催しております。初日は講演とパネルディスカッションで、2日目は円山川水系の散策を行いました。延べ140人の参加がございました。

終了後、この参加者からも出ていたのですが、ニホンザリガニが全道に分布しているということもございまして、全道で巡回展をできないかという話になりまして、この年末か

ら改めて円山をスタートにしてやっっていこうと思います。そのほかに、ザリガニかかわるいろいろな質問がきっとあると思うのです。そういったザリガニポストというのも作る予定で、今、準備しております。

資料2-2は、経営戦略とソフト事業に沿ったものでございます。これはいつものとおりですが、最初に7月26日から8月23日の間の土曜日に夜の動物園、8月12日、13日には、JTB主催の夏休みナイトキャンプ、それから、11月1日から3日までは、札幌近郊の農業者による農産物の配付、できるだけプロジェクトというものがあるのですが、そういったものを開催して、食の安心・安全とか地産地消をPRしてございます。

次に、7月26日から実施しておりますが、ANA感動案内人ツアーということで、これは首都圏に向けて販売しておりますツアーですが、解説とドキドキ体験の組み合わせをして実施しております。毎回、人数が少ない時でも2人、多い時で16人ぐらいまで参加しています。

それから、もう一つ、その下にございますトワイライトZOOです。これも新しく開発された商品ですが、JTBの商品で、夕方から夜にかけて動物園を活用しようというもので、これも延べ260人ぐらい参加がございました。

次に、資料2-3、施設整備と動物管理に沿ったものでは、ここにはございますが、実は昭和49年に建設した、そして34年経っていた建物だったのですが、熱帯植物館を解体してございます。これは、ガラス張りの大型の温室で、去年、実は上にあるガラスが落下したということもあって、今後、老朽化が進むともっと危ないかなということもございました。また、34年前につくった建物ですから、暖房効率も悪いということもあって、11月に解体しました。今後、解体に伴って解体と、さらにさよなら熱帯植物館というイベントを開くなどの取り組みをしております。ここを解体したことによって、年間で大体1,000万円ぐらいの暖房費の節減になるのかなという予想でございます。

それから、動物に関するものとしましては、産まれた部分ではエゾシカの歩、チンパンジーのチャコの子どもで、雄なのですが、まだ名前がついていなくて、土曜日から名前の募集を開始しようと思っています。

そのほか、亡くなったものとしましては、シロフクロウとかマンドリル、それから日本最高齢だったマサイキリンのタカヨ、ダチョウ、アナコンダと結構大きなものが亡くなっております。

このほかに、新たに増えたものとしましては、アルビノのmamushi、それからコモドオオトカゲが仲間入りしてございます。

そのほかのイベントとしましては、インドネシアフェアを実施してございます。これは、7月から8月にかけて実施しております。

そして、前回、いがらし委員の方から私も一肌脱ぐよということがございまして、先日、11月23日に、いがらし先生のイラスト教室を開きました。エゾシカ・オオカミ舎で対象をオオカミとエゾシカにしようということで対応しました。18組37名の方にご参加

いただいております。その中には、いがらし先生が直筆のサインをした記念品も込みで、この企画には林委員も絡んでいるという仕掛けでございます。それから、資料2-4になります。

入園者数と入園料の関係でございます。

入園者数は、この資料のデータでは19年度以前の分が年度末まで出ていますので、ちょっと数字が合わないかもしれませんが、20年度の11月末現在で61万8,376人ということで、前年の60万人をこの時点で超えたということでございます。19年度は53万人なので、11月対比にしますと、8万5,000人ふえて16%の伸びであります。そういうことで、入園料収入の方も1億6,944万2,000円で、19年度に対して16.5%の伸びになってございます。今年は平均で16%伸びておりますので、冬を頑張ると目標の70万人に到達するかなという状態でございます。増えてはいますけれども、これから気を抜かないで臨んでいきたいと思っております。

資料2-5のアニマルファミリーの資料でございます。

11月末のデータですが、20年度で申し上げますと、左上にあります、囲みの中のさらに囲みがあるのです。20年度合計会員数ということで、20年度だけで考えますと、141件、口数にして230口、132万円になります。昨年の方と合計しますと、275件、416口、232万円になってございます。さらに、1月からスタートしようということで、シンリンオオカミのキナコとカバのドンの2点を追加してございます。今のところ、結構いい状態で伸びてきています。こんな形で、これからも少しずつ拡大していくことによって、こちらの準備も整ってくるし、お客さんというか、ファミリーを少しずつ増やしていくことができると思います。一気に増えても、こちらが大変なものですから、そういった形をさせていただいております。

これが今までの経過報告でございます。

次に、収入については、資料2-6になります。

これは、数字がまだ見づらくて、年度の途中ということで2008年はどうしても落ちて見えてしまいますが、この中で皆さんが一番注目されていた灯油代ですけれども、11月現在でA重油だと、この春の時点では85円だったのですが、今は74円まで落ちてきて、少しずつ改善されてきています。燃料費のところの重油、灯油代については大分影響が出てきて、少し支出が改善できる方向になっていると思います。

あと、ここの部分は、数字をいろいろ説明していても途中の状態ですから、省略をさせていただきたいと思っております。

このほかに、今日お手元に1枚置いておいたのですが、ホッキョクグマの話です。皆さんに大変おわび申し上げますが、先般、釧路市動物園におりますホッキョクグマのツヨシ、それからおびひろ動物園におりますピリカ、これはともに円山で生まれて、それこそ婿入りしたはずが、両方とも判定が雌だったということでございます。

委員の皆さんについては、動物園は何をやっているんだよというところはきっとあるの

だろうと思いますが、実は非常に難しい性別判定なものですから、申し訳ございませんけれども、先般、11月末に訂正のマスコミ発表をしたところでございます。

経過はお手元のペーパーにざっと書いてあるとおりで、先般、11月に各報道機関に配付したものを同じものでございます。

資料2に関してはこれで終わりでございます。

○原田委員長 近況報告の資料2に関しまして、何かご質問等はございますか。

最近、円山動物園が前より随分よくなりましたねという声をよく聞くのです。何がと言うと、いろいろな面でという感じなのですけれども、かつてより、そういう声をよく聞くようになったなという感じがします。委員の先生方、いかがでしょうか。

例えば、最近、カレンダーを見たのですが、ちょっとご説明いただいている方がいいですか。

○金澤園長 きょう、お手元にカレンダーを置かせていただきました。私どもからの日ごろ皆様に対してなかなかプレゼントするものもないものですから、カレンダーを作りました。これは、実は、動物園とタイアップして企業が作ったものなのですが、この写真については、スチュワートさんという方で、円山動物園に協力していただいているプロの写真家で、その方が、好きに使っていいよということでデータをくださったのですが、今回、それを使って作ったのです。ですから、動物の表情もすごくいいのです。

そして、そのカレンダー会社も、企画を持ち込んで、これから写真を撮るような話だったら、うちの方からこの写真を出して、これで一つにしましょうということで取り組めたのです。今、大きい方のカレンダーが1,260円、小さい方の卓上が840円で、今はここのオフィシャルショップと街の中の大丸セントラルの2カ所にしか置いていません。結構、人気がございます。

先ほど、須藤委員からも、この表情がいいよねと褒めていただきましたが、実は、いろいろなイベントを行っています。去年も19年の段階でイベントを100回ぐらいやりまして、その半数が企業とか大学とかいろいろな団体と一緒にできています。今年はその割合がぐっと伸びてきて、実は70%を超えるのではないかと考えています。そのぐらい、応援団がだんだん増えてきています。そんなこともあって、円山は変わったよなところにつながっているのではないかと私は思っております。

そういう意味では、今、口コミも含めてご協力をいただいているということでございます。

○原田委員長 このカレンダーの質は非常に高いなと思いましたが。普通のカレンダーだと、こよみという感じなのですけれども、動物園らしいというのは、ここに名前とか生年月日を書いてあるのです。これがなかなか見つけられなくて、何という名前だっけと。これは、毎日見ていると、動物園にいるみたいで、これはなかなかいいアイデアですし、きれいな写真とともに、非常に動物園らしくていいなと思います。

先ほど、近況報告で、イベント等のお話がありましたけれども、私は去年ぐらいから酪

農学園大学をよく聞くようになって、いい大学が協力してくれているのだなどはっきり思います。だから、シンポジウムというふうにもうたえるし、多分、ここが所蔵しているいろいろな動物関係のネットワークの活用という点で、私は国際化へ向けて秘かに一步を踏み出しているなという感じがしているのです。

一つ一つのイベントの質が高まってきているような感じを持ちまして、これは動物園の職員の方々の努力の賜物が目に見えるようにあらわれてきていると思います。いがらし委員もいろいろとご協力をいただきました。かなり具体的な形で花が咲き出している感じがしまして、大変うれしく思っています。

この近況報告について、何かご意見はございませんでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○原田委員長 なければ、次に行きたいと思います。

次は、これが今日のメインテーマでしょうか。円山動物園へのゾウの導入についてです。これについてご説明をお願いいたします。

○金澤園長 それでは、資料3とA3の大きい添付資料の二つでご説明をさせていただきたいと思います。今日のメインテーマということですが、事前にお配りしてざっと目を通されていると思いますが、簡単にご説明させていただきたいと思います。

まず、資料3-3をご覧くださいと思います。

資料3-3に、動物園におけるゾウの歴史等が書かれてございます。これは、簡潔に説明させていただきますと、推定7歳のアジアゾウの花子が動物園の開園2年後の1953年、昭和28年に来園しました。そして、たちまち市民の人気者になりまして、2006年に国内で2番目の長寿として還暦のお祝いもしたのですが、昨年、推定60歳で長寿をまっとうしました。そして、今年の1月に1周忌を行いまして、現在は骨格標本ということで科学館の方に展示されてございます。

さらに、先般、11月ですが、釧路市動物園のナナが亡くなって、実はこれで道内には帯広にしかいないということになります。帯広も、今、48歳ですから、もし花子と同じ年数を生きるとしても、あと12年が限界です。そうすると、北海道からはゾウがいなくなる可能性があります。

一方では、旭山がゾウを入れますという構想を出しておりますので、時期はまだ分かりませんが、いずれ入ってくるかと思えます。

そして、ゾウは、キリンやライオンと並んで動物園の必須アイテムと言われております。しかし、前からお話しさせていただいておりますが、今、ゾウは希少動物で、単に展示を目的にするだけではなかなか導入できない状態です。繁殖とか野生動物の保護を目的にしなければ、そういった理由をつけていかなければ導入できません。

ゾウは、子どもが産まれても、母親だけではなくて、その周りにはいる雌ゾウが手伝います。そういった意味では、子どもを繁殖することを目的としますので、子どもを育てる環境をつくるためにも、雄1頭に対して複数の雌を導入していかなければならないというこ

とになろうかと思えます。実は、その頭数に見合った大きな動物舎と外側の運動場が必要になるところにつながっていくことになります。

ゾウ自体も、国内では余剰の個体はおりません。そんなこともございまして、海外から輸入することになろうかと思えますし、必然的に輸送費等もかさんでくるところでございます。

ゾウの飼育には、愛情はもとより、経験と信頼関係が必要になってきます。それから、国の内外を問わず、動物園内で飼育員が死ぬような事故というのは、実はゾウが多いのです。そんなこともございますので、もし導入したとしてもゾウ1頭に飼育員が1人ぐらいのマンツーマンと言うと変ですが、そういったランニングコストも必要かなと思っております。

新たなゾウの導入については、動物園としてはぜひ導入したいということで、園内の掲示板にも告知させていただいておりますが、だからといって、今、申し上げたように大きな建物を作ったり、輸送費にコストが掛かってきますので、そんなことを考えれば、市民の皆様から意見を広く聞きながら導入の判断をしていかなければならないと思えます。

既に園内では、ゾウに対する動物園の考え方を掲示しておりますし、約1年前になってしましますが、2月には、大学生や専門学校生を対象に「市長と“おしゃべり”しませんか」を催しております。資料3-1に載っております。

当日、スタートするときにはゾウが必要かどうかについて手を挙げていただきましたら、必要だ、要らない、分からないというのが3分の1だったのですが、実際に最終的にアンケートを取ったのが、この資料3-1にあるグラフでございます。

当日、35人以上いたのですが、アンケートを置いていったのがこの数なのだろうと思えます。賛成が42%、おおむね賛成が23%、反対が29%という状態です。

賛成の理由としましては、環境問題を考えるとか子どものためといった理由が多いようでございます。それから、おおむね賛成の理由については、財政面や飼育面での課題をクリアできれば賛成するという意見です。一方、反対の主な意見としましては、やはり財政負担ということを上げている方が多かったようです。

これがゾウにかかわる市民すべての意見ではなくて、一部の方の意見ですが、こういう状況です。

それから、花子が亡くなってから、動物園に来られる方の中で、ゾウはどこにいますかとか、ゾウを早く入れてほしいという声が結構聞かれます。資料3-2は、園内に設置していますご意見箱に寄せられた意見を整理したものでございます。

ご意見箱は、1年間に1,600件ぐらい入っています。幸いと言いますと変ですが、普通、ご意見箱というのは、何かあると悪いからこういうところを直せという意見が多いのですが、動物園は応援するよという意見も結構入っていて、それで1,600なのですが、それを整理してみますと、花子が亡くなってから約2年になりすが、2,860件ございました。その中で、ゾウにかかわる記述があったのが7.7%、約8%ございました。

さらに傾向を見ますと、寂しいとか残念という割合が24%、導入して会いたいのが68%、いなくてもいいかなが2%、その他というふうになってございます。これが、園内のご意見箱でございます。

裏の方に属性も整理してございますので、見ていただければなと思います。

それから、先ほど、ゾウを導入するとしたら大きな施設をつくらなければならないというお話をしました。それでは、どんな施設でどのぐらいの予算が必要かということを検討してみました。ただ、円山動物園では、現在のところ、入れるか入れないかも決まらないうちに設計できないので、他園の事例を持ってきて整理してございます。

それを整理したのが資料3-3の裏側でございます。

まず最初に、沖縄こどもの国でございます。A3の資料だと、添付資料1で平面図が裏表になってございます。

沖縄こどもの国は、雄、雌各1頭を昨年12月にインドから入れてございます。その際、ゾウ舎建設に約1億7,000万円、外側の放飼場が360万円、けた違いです。そして輸送費が約4,000万円となります。ただ、沖縄は亜熱帯ですから暖房もございませんので、インドとか東南アジアの気候に近いものですから、そのままの状態で飼育できるということで、ちょっと参考にはならないかと思えます。

それから、ちょっと前になりますが、昨年7月に名古屋の東山動植物園で雌を1頭だけ入れてございます。ここは、もともと雌が1頭のところに雄、雌を1頭ずつ入れたのです。そして、現在は雄1頭、雌2頭の関係になってございます。ここは、もともとあったところに入れていまして、余り建設費は伴っておりませんので、輸送費だけを見ていただけると2頭で1,000万円ということです。ですから、沖縄の4,000万円はすごく高いなという感じがします。

次に、これから新たに導入を予定しておりますのが、福岡市の動植物園です。ここは、現在、雌2頭のところに、時期は未定ですが、雄1頭を導入する予定です。添付資料2にイメージ図がありますが、こんな施設にしようという取り組みをしてございます。ゾウ舎に3億2,000万円、外側の放飼場に4億5,000万円、約8億円を見込んでおります。

福岡を見ていただいて、次に上野のパスを見ると、何となく似たような絵だなと感じられると思いますが、みんな上野を参考にしております。上野動物園ですが、平成16年にゾウ舎を完成させました。添付資料2にございますが、飼育頭数は雄1頭、雌4頭で、建物735平米、外放飼場が2,170平米ということで、合わせて13億円ぐらいです。そして、上野の場合は、新たに導入したのではなくて、繁殖を目的としてもともとあったものを解体して新築しております。

もう一つは、添付資料4の大阪の天王寺動物園です。ここは、天王寺そのものがずっと長い年月をかけて改修しながら動物園をつくり直してきましたので、その中でアジアの熱帯雨林を再現するというので、平成15年にゾウ舎を完成させました。ここは、動物園

の数からいくとすごく贅沢なのですが、雌2頭でこの面積を使っているのです。ここは、建物が58平米で、外放飼場が3,616平米とゆったりしたものです。実は、これでも13億円かかっております。

最後に、資料3-4をご覧いただきたいと思います。A4の横判でございます。

これは、「ゾウ導入への夢のシナリオ」というタイトルをつけておりますが、一応、基本計画をベースにしてシミュレーションをしてみたものでございます。

これは、上から1年目、2年目というご理解をいただきたいと思います。ゾウを導入したらというもので、現時点では導入を前提とした検討はしていないので、こういうシミュレーションということをご理解をいただきたいと思います。

例えば、ここにありますように、1年目は検討としては導入可能なゾウを探します。まず、国を探します。一方では、市民アンケートをとりたいと思います。これは、動物園の基本構想を検討するときに、実は市民1万人アンケートといういろいろな項目を世論調査の中でやっていますが、その中にゾウの関係を入れたいということで進めています。実は、これが一番回収率がいいので、そういうことをやろうと思っています。

それから、ちょっと飛んで3年目ぐらいには、輸出国ときちんと交渉をして、ここには花子募金と書いてありますが、市民の皆さんにご協力いただくような方法を考えていきたいと思っております。

そして、四、五年目には設計、7年目ぐらいには工事着手して、9年目ぐらいにはゾウが一、二頭入ってくるようなシナリオで見てございます。

一応、簡単にざっと資料の説明をさせていただきました。

○原田委員長 ありがとうございます。

ゾウの導入についていろいろと経緯から市民の声から掛かる費用、ほかの動物園の事例、それから、入れるとすれば10年目ぐらいにオープンというようなシナリオまでご説明いただきましたけれども、このような資料をベースにして、委員の先生方に、それぞれ私はこういう意見を持っている、こういう考えであるということをご披露いただきたいと思っております。そんな進め方でよろしいですか。ゾウの導入について、私はこう思いますということを書いていただければと思います。

今、目が合っております原委員からお願いします。

○原委員 正直に言いまして、困りました。

私はこれといった意見というか、思いがまとまっていないのです。もちろん、動物園にゾウがいるということはすごくうれしいですし、ぜひ賛成したいという気持ちもあるのですが、やはり、経費の面とか、いろいろな面から考えますと、すぐ賛成という思いがなくて、もう少し参考になるような数字を見られたらなという思いがあります。

先ほど園長からお話があった中で、実際に導入ということを検討していないために、実際に導入した後のランニングコストなどに関しては計算していないということをおっしゃっていました。この夢のシナリオからいきますと、11年目以降に関して、これから維持

していくための費用ですね、やはり市民からの税金で賄われていくわけですから、その数字は参考にさせてもらった上で、アンケートなどにも盛り込んでほしいという思いがあります。

なぜかといいますと、今の円山動物園の規模にプラス動物園舎が入る考え方と、もう一つは、今の人員に沿った中で、ゾウを導入する場合には、ほかの動物などを削減していかなければならないということもあるだろうと思いますので、夢のシナリオの中で具体的に提示されると、市民側としては判断の材料として考慮しやすいと思います。

ですから、その辺を踏まえた上で、もし大きな数字が掛かってくるのであれば、札幌市だけではなくて、北海道としてとらえた考え方もあるのではないかと考えております。

意見にはならないかもしれませんが、私はそう思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

イエス、ノーということだけではなしに、ゾウの導入に関してお考えをいただければ結構でございます。いい意見を聞かせていただきました。

林委員、いかがですか。

○林委員 ゾウは大好きで、ゾウの作文を書いて入選したのが、私のこういう業界に入るきっかけでありました。草原で群れをなして走るゾウの小説を読んで胸を躍らせた少年時代を含めて、雪の中で花子を見たときの感動を含めて、僕は再びそういうものを目に出来ればなというのが率直な個人として考えです。

急に動物園は急にゾウを導入していいのでしょうか、どうでしょうかと聞いているのですね。ほかの動物のときは勝手に導入しておいて、何でゾウのときに聞くのだと思いました。最近の金融不況とかいろいろと厳しい中で業績を上げてきたというのはすばらしいことで、私どもの放送でも、僕はS T Vとしてここには参加しておりませんが、S T Vに所属する者としても、本当に今回の業績については評価させていただきました。僕は評価する立場ではないけれども、非常に拍手を送る放送をさせていただいたのです。

ただ、ともすると、経営的に上向きになったという中、日本中そういう話ばかりで、利益を上げたら偉いという風潮の中で判断させる傾向がとても強くて、赤字が悪いみたいな。ただ、動物園には目的があって、その目的のためにゾウを導入するというふうに、本当に目的が掲げられているのかなと思うのです。希少動物でと書いていますけれども、あるいは前にいたからと書いてありますけれども、前にいたときは博覧会的な要素の中から、動物園にゾウはいるものだという中でゾウが導入されていたと思うのです。しかし、今、未来にメッセージを送る円山動物園という点で言うと、円山動物園は果たしてゾウを置くことによってどういうメッセージを送ろうとしているのかということを確認にされた方がいいと思います。それがないと、せっかくここまでメッセージを送り、私たちの動物園と言ってきて、「だから私たちはゾウを入れますか」というふうに聞いたのだと解釈できるのですが、まずはメッセージをきちんとつくるための討論というふうにするすれば、基本的には、市民を巻き込んで、マスコミを巻き込んで、円山動物園はというふうにゾウを

入れようとしているのか。

やはり、地球環境が、極端な例で言うと、かなり温度が上がってきていまして、深刻な状態で言うと2030年に一つの機を迎えると言われていています。50年には最悪な状態の中で生きていかなければならないと言われていた中で、そこに意味を見出すのだというふうに考えると、市民の人たちもその中で論議を交わせると思うのです。つまり、札幌が亜熱帯になっているとするとちょっと悲しくて、雪もないところでどうするのかということなのですけれども、このまま雪のあるところで動物を見るということ、たしか円山動物園はそういう発信の仕方をしていたはずだと思います。僕が取材に来たときにも、雪の中にゾウがいるというのが、もちろんキリマンジャロとかアフリカだって雪は降るわけです。我々はどうしてもアフリカとかインドは雪が降らないと思っていますが、降るので、当然、ゾウはそういう寒さにも耐えられます。しかし、そうは耐えられないみたいなことを僕は学んだような気がするのです。だから、ああいう施設を作ったんだよという説明を受けて、なるほどと思ったのです。要するに、僕らが見るこのゾウはすごく貴重で、逆に、僕たちの雪の暮らしというのは、都市の中にいるけれども、それほどの豪雪地帯に住んでいるんだということをゾウを通して学んだような気がします。

そういう意味を含め、子どもたちも交えて、導入することを目標として、導入する前にいろいろな議論をして、つまり導入するときにとってもお金もかかる、だけど、それを超えてもゾウを必要とするのは一体どういう意味があるのかということをお話されると、円山動物園は世界に冠たる動物園になるのかなと思います。ゾウを引き受けるだけなのだけれども、大仰な動物園だなと思うかもしれないけれども、とてもいいポジションを得るかもしれません。議論をなくして導入し、動員数がふえるから導入するのでは円山らしくないのではないかなというのが私の意見です。

○原田委員長 ありがとうございます。

確かに、どういう意味があるのかということをお考えないでイエス、ノーはちょっと早いというのは、そのとおりだと思います。

いろいろと地球環境問題も含めて、ここでゾウを導入するということについて、そういう題材でみんなが考える環境をまず作った方がいいなとお聞きしましたけれども、確かにそのとおりだと思います。

それでは、鈴木委員、お願いします。

○鈴木委員 今日、ゾウの導入が主たる議題だということで、私なりに何か態度表明をしなければならぬのかなと思ひまして考えました。

今、林委員がおっしゃったようなことですが、いるといいと思いますかと聞かれば、多くの方がいいと思うと。先ほど、園長からゾウは動物園の必須アイテムだというお話もありましたし、動物園にゾウがいるものだという考え方があるのだらうと思いますが、どちらに投票するのかと言われたときに、入れなければならない、国のいろいろな条件をクリアして入れる理由が、どうも私には見つかりません。

こちらに公募の委員として加えていただいたときに、これからの計画を見せていただいて、こういうものが出来ていくというもののの中にゾウ舎もあって、ですから規定のルートとしてそういうふうになっているのかなという印象を若干受けたのです。ですが、ここで聞かれるのであれば、やはりいなければならない、円山のこれからのプランにとってぜひ必要であるという理由があるだろうと思います。

逆に、先ほど園内で回収されたご意見箱に要らないという意見はほんの少数だったということですが、こういうところに投函される方は、要らないという人は余り投函されないもので、公平に、これが少ないからということにならないところがあると思います。

大学生のアンケートの中の2ページ目のところですが、③ゾウを入れる前に円山動物園にいるほかの動物の飼育環境を改善した方がよいというご意見がありますが、これはよく考えていらっしゃると思います。

ですから、私自身、余り肯定的な意見を持ち得ていないので、この場で伺いたいです。ゾウというものが動物園にいることの意味とか、この動物園にいることの意味というようなことをここで伺いたいと思ってまいりました。

それから、今後の動物園は、必須アイテムがそろっているような動物園が日本各地にあるという形でいくのか、そうではなくて、それぞれの目標とかポリシーに特化したものになって動物園と相互にいろいろな連携をとっていくのか。先ほど、旭山に入るといようなお話もありましたので、そういうことをも考え合わせなければならないと思います。

今、雪の中のゾウに感激されたというお話がありましたけれども、私は別府というところで育ちまして、そこにも、やはり花子というゾウがいて、小さいころ、子どもを乗せてくれたのです。ですから、大変楽しかった思い出がありますが、もう少し年を重ねて中学生ぐらいで動物園に行ったときに、花子が1頭だけでぽつんと、そして草も木も余りないところにいるという状況で、かわいそうだなという感想を持ったような記憶があります。ですから、ゾウというものはこうやって生活していて、こんな特性を持っていてということ、今、札幌の子どもたちに教えていくというのは意義のあることだと思うのですが、この中にもパンダもほしいという意見もありましたが、いた方が楽しくていいのだと思いますけれども、そこは優先順位といいますか、この動物園の考え方といいますか、林委員の言ったことと重なるかと思いますが、そのような意見でございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

まず、一回りしてしまいませんか。

須藤委員、お願いします。

○須藤委員 稚拙なのですけれども、私も林委員や鈴木委員と同様に、導入する意味が見つからなくて、今現在、私の中では導入しないという形もありではないかと思っています。

というのは、円山動物園の役割を考えたときに、札幌市の環境教育の拠点ということが上げられています。その観点から言うと、寒い札幌でゾウにとって必要な環境を用意するのは非常に大変だと思うのです。経済的にも環境的にもです。市原ぞうの国のホー

ムページを見てみると、やはり、こういう環境の方がゾウにとってはいいのだろうなと思ったのです。それをつくるのは、ここではかなりの費用と面積が必要かと思うのです。

では、環境教育をするという意味では、ゾウがいないということで環境プログラムを作るのにいいのではないかと思います。みんなゾウが動物園にいるものだというのは、既成概念だと思うのです。サーカスはゾウがいる。動物園にはゾウがいる。では、上野の動物園にはパンダがいなかったら上野動物園ではないのか、上野動物園にはほかの動物もいるわけです。

幸か不幸か、ホッキョクグマのニュースが流れまして、全国的に円山動物園にホッキョクグマがいるということが分かりました。繁殖に力を入れているホッキョクグマを前面に押し出して、いる動物としてはそういうものを環境教育のプログラムの対象として、いないものはゾウです。では、そのゾウがいなければいけないで1枚の看板が置いてあればいいかということではなくて、例えば、ゾウ館を建設する予定地に環境教育を行う建物をつくるなりして、バーチャルリアリティを取り入れたようなライブラリーですね。民族博物館だと、ボタンを押して、どこどここの民族の生活の仕様とか、こういう儀式をしますというのがあるのですね。多分、これから、その手のものは発展していくと思うので、ホログラムではないのですけれども、3Dで見られるような、いないのだけれども、体感できるような施設をつくるなりして、子どもだったら大人になったときにゾウのいる動物園に行く、例えば仕事とかでそういうところに行くときに、時間があったらゾウに会いにいこうとか、そういう夢を育てる場にしてもいいかなと私は考えています。

円山動物園は、ほかの道内でもない、日本でもない、世界の中で特殊というか、先駆けて既成概念を覆すような動物園であってもいいのではないか、それが円山なのではないかと思うのですけれども、いかがでしょうか。

稚拙なのですけれども、そう考えています。

○原田委員長 ありがとうございます。

それでは、服部副委員長、お願いします。

○服部副委員長 皆さん、とてもいいことばかり言うものですから、感心しながら聞いていたのです。

原委員のおっしゃっている財政の面からいくと、非常に厳しい問題は確かにあると思います。しかし、反面、円山動物園としての役割を見たときに、ゾウというのは、ある意味で言えば必要なアイテムであります。現実には、そういう意味ではギャップがあることは間違いないです。

須藤委員がおっしゃったことは、私も現場でじっと見ていたのですけれども、なぜ今、あそこをがらんどろしておくのだろうか。やはり、あそこでゾウを通した生物多様性、あるいは環境のテーマに基づいて、今、バーチャルというふうにおっしゃっていただけども、いろいろな形で発信できると思います。空けておく手はないです。やはり、その中で何らかの形で発信する活動をしなければいけないと思います。その上で、いろいろ

なこと積み重ねが必要になってくるのだろうと思うのです。

私は、ゾウが要るのか要らないのかというディスカッションはちょっと乱暴過ぎるかなという感じがするのです。それよりも何よりも、円山動物園のランドデザインとしてどんな姿が必要なのだろうかというものを、ある意味でゾウをテーマの一つとしてとらえながら、ランドデザイン化しておく必要があるのではないのかと感じるのです。

リスタート委員会で基本構想を練った時にも、「人と動物と環境の絆をつくる動物園」というテーマを掲げ、いわゆる基本理念を掲げて、札幌市の環境教育の拠点にしよう、さらには北海道の生物多様性の確保のベースキャンプにしよう、そして、林委員のおっしゃったような多様なメッセージを使えるメディアとしての役割もそこに落とし込んでいこうという考え方が出てきました。

その中でとらえたときに、ゾウの役割、ゾウを導入してかなえられるものになるのだろうかという考え方が必要なのではないかと思うのです。私は、そういった意味では、ゾウということから離れて冷静に考えていくと、やはり生物多様性というテーマをとらえた中で、ある意味で言えば種の保存も含めて、ゾウに定型的に種の保存ということを経めていくと、複数頭、いわゆる雄1頭に対して雌2頭ないし3頭ということになって、最終的には四、五頭のレベルと。そういう意味では、まだやるものがもうちょっとあるのかなと思います。

キリンも今は1頭だけですけれども、早く連れ合いを与えてあげなければならないだろうと思います。それが、札幌の市民動物園としての位置づけになっていくのではないかと思います。ですから、複数頭で、複数匹で、あるいは複数羽で、どこへ行ってもファミリーのほほえましい姿を見ながら、生物多様性なり、あるいは種の保存なりというものを知らず知らずのうちに教え込んでいける、教育することができる、啓発することができるという物のとらえ方こそが必要なのです。その延長上で、やはり動物園にはゾウが必要だということになれば、それはそれでいいのではないだろうかということです。

そういう意味では、この委員会でどうこうということができるはずもないですし、年内にやるということも出来ないのですが、何らかの形で10年後を見据えてランドデザインを作っておくべきだろうと思います。

ことは随分亡くなりました。どこに書いてありましたか。

○金澤園長 資料2-3です。

○服部副委員長 シロフクロウが死にました。マンドリルが死亡しました。マサイキリンのタカヨが亡くなりました。などなどを考えていくと、そういう意味では、すぐに補充するというのではなくて、ある意味で言えば、動物園というのは数頭、数匹、複数羽で運営していくべきだろうと思います。先ほど申しましたように、キリンについては1頭しかいなくなってしまったものですから、これらはゾウの前に素早くタカヨさんのかわりが必要なのではないかなと思います。

とりあえず、そんな意見でございます。

○原田委員長 ありがとうございます。

それでは、太田委員、お願いします。

○太田委員 私も、今回、2回目の会議の参加になりまして、本当によく分からないまま参加させていただいて大変申し訳ないのですが、ゾウのことに關しては、本当にどちらがいいかというのは、正直に言って、よく分からないところです。

ただ、私はこういう委員に入ったということで、周りの方にお話をさせていただいた中で、こういう現状などを考えないで、普通にただ物を言っているだけなのですが、ゾウがないということを皆さん言われて、ゾウが見たいと言われることがほとんどということがありました。先日、私も姪と動物園の方に遊びに来たのですが、やはり姪もゾウが見たいと、普通の思っだけでゾウを見てみたいと言っていました。

私も、小さいときは、遠足と言えば円山動物園という形で来ていた記憶があつて、私も親と一緒にゾウの前で写真を撮ったという思いが強いので、円山動物園と言えばゾウというのが私の中に勝手なイメージがあつたので、いなくなったと聞いたときは寂しい思いがあつたのですが、皆さんの意見を聞いてみたかつたし、こういうお話を聞いて、いろいろな事情を知っていくと、やはり一概に言えない部分がありました。

先ほどからお話があつたように、目的なりを考えた中で、急いで決めることなく、今後について考えていったらいいのかなと思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

それでは、井上委員、お願いします。

○井上委員 率直に言って、どっちがいいのかというのはすごく迷っているというか、結論が出ないので。個人的な話で恐縮ですが、うちの息子はゾウがすごく好きで、円山動物園に来るたびに、「花子がいなくなっちゃったね」といつも言っているので、ゾウが見たいという気持ちがあるお子さんは多いでしょうし、現状として、北海道内の動物園にゾウがほとんど壊滅状態なので、そういう点では経費をかけても見せ方によってはすごくメリットはあるのかなと思います。

ただ、先ほどもご意見があつたように、判断材料として、実際に円山でやるとしたらどれぐらいの費用がかかるのか。今、建設費だけが参考で出ていますけれども、ランニングコストは恐らく膨大ということを見ると、どのぐらいかかるのかというのが、今の時点ではちょっと判断材料が出ていないのでまだ何とも言えないという部分があります。

それから、これも先ほどありました意見と重複するのですが、最初に園長の方から必須アイテムという話が出たのですが、いわゆる動物園の中でメジャーと呼ばれるような動物ですね。ゾウとかキリンとかライオンといういわゆるメジャーな動物はいるのですが、そういうものは必ず動物園にいなければいけないのかというと、先ほどからお話がありましたように、円山動物園の方針というか、どういうふうな動物園を目指すかということがやはり必要なのだと思います。

ちょっと話は変わりますけれども、前回の会議のときに、新しく出来たエゾシカ・オオ

カミ舎がすごくいいと各委員から評判がありました。私はオオカミ好きなので注目しているのですけれども、どちらかという、オオカミは動物園の中では余りメジャーではなくて、余り見る人もいなかったのですけれども、あの施設ができたことで、足をとめて見る人がすごく多くなりました。そういう点では、必須アイテムという話もありましたけれども、メジャーと言われるゾウにそれだけお金をかけるよりは、今までマイナーだった動物、あるいは、今いる動物の見せ方をもっと工夫して見てもらうという形もあり方として、市長とのおしゃべりの中でも、今いる動物の飼育環境の改善とか、ほかの見せ方を考えた方がいいという話もあったと思うのですけれども、そういう考えもありなのかなと思います。

そういう点では、ゾウを入れるということを、今のところ賛成とも反対とも私としては判断がつかない状態で、皆さんの意見と同じになるのですけれども、まずは動物園としての方針と、実際に入れる場合にどれだけの費用等がかかるのかという判断材料をもう少し出していかないと、今の時点ではちょっと決められないと思います。

以上です。

○原田委員長 ありがとうございます。

いがらし委員、いかがでしょうか。

○いがらし委員 最後でよかったなという感じです。

皆さんの地に足のついたすばらしいお話を聞かせていただいて、私は、もともと職業柄、地に足がついていないので、ゾウが欲しい、見たい、いたらいいという感じでずっと頭の中を駆けめぐっていたのが、ずるずるずると足を引っ張られて現実に戻していただいたのはありがたかったと思うのです。

言ってしまうと、理屈ですね。そう言ったらおしまいかもしれないけれども、お金が掛かるとか、なぜゾウがいなければならぬのか、ゾウはそういうものを超えたものだと思うのです。林委員の言うように、未来にメッセージを送る動物園として、なぜ円山動物園にゾウが必要なのかということ、市民を巻き込んで大いに話し合っていたらいいと思います。私は、何とか必要だという方に持っていきたいのですけれどもね。

やはり、これも考え方として地に足がついていないかもしれないけれども、結局、みんなが必要だと思ったら、お金はついてくると思うのです。そういう意味では、私は北海道の子どもたちに赤ちゃんゾウも見せてあげたいし、ゾウの優しさとか、強さとか、絶対にそういうものを感じさせてあげたいです。

先ほど、須藤委員が、バーチャル的な形でどうだろうとおっしゃったのですけれども、やはり世の中がバーチャル化し過ぎていて、バーチャルな土地を買って、株を買ってもうけたとか、損したとか、そのバーチャルな中だけで生きている大人たちも結構いるご時世に、動物園がバーチャル化してしまう部分が出てきてしまうのは怖いと思うのです。そうではない感じで、例えば、空けておくのが寂しいなら、もっと思い切って寂しくさせたらどうでしょうか。要するに、花子を偲ぶ部屋みたいにしてしまうとか、花子のみんなの思い出の朗読会があるとかね。私は、花子ちゃん、花子ちゃんと、花子を偲んであげてもいい

いのではないかと思うのです。だから、逆に、血の通った花子に夢とか希望とか思い出を与えてもらった人たちが、花子を偲ぶというか、大事にする、そして未来にまたゾウが円山に来る一つ道しるべとして、空いている寂しさを活用するのはいかがでしょうか。

○原田委員長 ありがとうございます。

夢をもう一度復活していただいたようで、うれしく感じます。

委員の先生方のいろいろなお話を伺いましたが、私も一言、言わせてください。

今まで、経済的な維持コストが非常に高い、それをどういうふうにするのか、円山の規模というときに折り合うのか、北海道がそこまでやるのか、なぜ札幌にいななければいけないのか、それから、未来へのメッセージとしてゾウは一体どんな意味を伝えることができるのか、ゾウの導入の意味をもう少しきちんと考えた上でやるならやるという努力も必要ではないか。

それから、アンケートで必要か必要でないかということだけを聞いても、なかなか答えにもならないし、その結果が本当の意味での結果というふうに考えていいものかという鋭いご指摘もありました。そこで、市民に対して導入の理由を語ってもらって、賛成なら賛成、反対なら反対という声を聞くべきだろうというご意見だったように思います。

それから、環境教育ということで、今もお話がありましたけれども、VRといった仮想的な世界で環境教育を出来るではないかというお話もございました。それから、10年後を見据えたランドデザインを描いた上でゾウの導入を組み込んでいくべきだと、これも非常に正解だと思うのです。その裏づけというか、意味としては、生物多様性というものの保存としてゾウが世界的にどんどん減っているということであれば、それを飼育し、再生していく、そして保全する、それが動物園の役割ではないかというご意見もございました。

まだ情報が多くなくて、急いで決める根拠を私たちは持っていないのではないかというご意見や、ゾウというものを手当てする前に、もっと今いる動物園内の動物の相方を増やすとか、探すとか、もう少しやることがあるのではないかというご意見もありました。

最後に、いがらし委員からは、夢を壊さないでという理屈を超えた必要性の意味みたいなものをみんなで考えるべきだろうというご意見がありました。そんなことがいろいろと出されたように思うのです。

私は、一言で言ってしまうと、ゾウを動物園が買う、あるいは市民税で買うということではなしに、市民に分譲で買ってもらったかどうかと思います。私は、やるのだったらそれぐらいやってしまいたいと思います。実際に飼育するのは動物園けれども、その所有権は市民が持っているという分譲所有権みたいな形ですね。今、北海道には550万人ぐらいいますが、その1割で55万人です。55万人の人が5,000円出したとしたら26億円ぐらいになるのではないですか。それぐらいになってしまうわけです。そういうふうに考えていくと、ここで13億円、すごいお金がかかるなど言っている事柄が手の届くものになります。つまり、みんなでお金を出して分譲する、私はしっぽを買いますとか、

私は足のつめを1本買いますとか、鼻の穴一つをいただきますとか、そういうふうにして買う。そのかわり、動物園に行かなくても、北見の端にいても、釧路でも毎日動物をネットの上で見られる。そのかわり、パスワードがきちんと与えられていて、つまり、ゾウのファミリーになるのです。アニマルファミリーのゾウファミリーになってもらった人は常にそれを見ることができる。うちの子はどうしているかしらというのがいつでも見られる。そして、たまには動物園へ行きましょう、会ってこようということで、ファミリーの確認をしに動物園へ来る。そのことによって、架空でもない。ネットで見ている以上、仮想の時間もあるし、ニュースも流れてくるし、実際の動物園にも行くことができる、管理は動物園が管理するというふうにして保全も保たれていくのではないかと思います。

だから、そんなに無理なこともないかなと思うのですが、一つ大きなことは、九州の動物園がこれをやるのと、北海道でこれをやるのと、全く逆の意味があると思います。多様性の保存であれば九州の方がやりやすいのではないかと思います。そうではなくて、なかなか見られない動物を北の国で見せるのが意味があることがというのも成り立つわけですね。宇宙に行けないから地球で見るので、宇宙に行ける人は非常に限られた訓練された人々で、なぜ地球で見られないかという、行けないから見るのですよという宇宙科学教育が地上で行われているわけです。それは、必ずしも否定出来ることでもないと思います。そういうふうだと思いますと、どっちにも理があるのです。見たいことには変わりはない、その夢を壊さないように、あとは手続を考えたらいいのではないかと私は思っているわけです。

ただ、ここで多くの委員の方がおっしゃられるように、今の時点で導入か、非導入かということではないなということがよく分かったということではないかと思います。

そういう意味で、アニマルファミリーとしてゾウを導入する。アニマルファミリーとして導入するということは、入園料だけではないのですよという覚悟をしている人を出来るだけ多く集めるということにかかってくるのかなという感じがします。そうすると、自分のうちの子なので、責任も持てるしかわいがり方も違ってきます。ただ見に行くのではないかなと、動物園に我が子を見に行くのではないかなというように一つの仕掛けも考えられるのではないかと思います。

言い足りなかった人は、もっと言うわよというのはありませんか。

原委員は第1号でしたので、そういうことだったら言うぞということがあればお願いします。

○原委員 そんな特別なものはないのですけれども、皆さんの意見を聞きながら、私は個人的には何としてもゾウを入れたいという気持ちになってきました。

先ほどの林委員が話しされた雪の中のゾウというのは、実は私も花子と雪で遊んだことがあるのです。円山動物園では、この寒さの中で五十何年間、ゾウを飼えたという実績があることと、雪の中で対応しているゾウがいるというのは、世界的にはどうか分かりませんが、国内の中でも珍しいことなので、その中でもゾウは感情が伝わってくる気が私はし

ているので、そういうものがある動物園というのはすごく魅力があると思います。個人的にはそう思っています。

それと相反して、ゾウがいなくても魅力のある動物園をつくれるのなら、ゾウはいなくていいです。極端な言い方ですが、そんな思いでいます。

○金澤園長 ちょっと補足させてもらっていいですか。

説明の中で不足していた点ですが、「市長と“おしゃべり”しませんか」というのは、20歳前後の人を選んだのですが、今皆さんが言われているのと同じように、子どもは、絵本などを見てゾウを見たいと言うのです。そして、40代から50代に上がると、昔に見たゾウを見たいと言うのです。ですから、20歳前後というのが意外とシビアではないかということで市長とおしゃべりしませんかをぶつけたのです。

もう一点は、ゾウを入れるとなると、ゾウ舎などを作らなければいけないのですが、その10年間、ゾウのことだけをやるわけではありません。基本計画に基づいて、ほかの動物たちの飼育環境なども当然やります。この時もそうだったのですが、どうもそこが抜けていて、ゾウだけをずっとやるという誤解があったようです。きちんと基本計画なりに基づいて、今、計画しているものを順次やっていきますから、動物の住む環境というのは、今年三つ作っただけでお分かりいただけたと思いますが、ああいうふうに変えていきます。ほかの動物は、マイナーなものもいずれメジャーになるように我々も取り組んでいっていますので、そういう面では、今までにない魅力を稼げると思っています。

ただ、ゾウというのは大きな問題ですから、ほかの動物舎なら3億円も出したら立派なものができるのですが、ゾウはその3倍から4倍というスケールなものですから、皆さんにご議論をいただこうと考えたのです。

○鈴木委員 私は、皆さんのお話を伺って、こういうことを判断するには、こういう話をたくさん聞かないと判断できないと思いました。私もアンケートを拝見して、園長が言うように一番ニュートラルな世代が大学生くらいだと思ひまして、この間、ゼミの忘年会で学生に聞いたら、半分くらいは円山動物園に行かないから関係ないと言うのです。もう半分くらいは、それはいた方がいいに決まっていると言うのです。つまり、材料が全然ないのです。先ほど、市民を巻き込むというお話がありましたが、本当に市民が決めるという格好で、市民の方々に、どういう形がいいかわかりませんが、どんどん情報提供して考えていただくと。札幌市は、市民がゾウを飼うことを決めたという形にしていく、あるいは、こういう理由で飼わないことにしたということをしちんと外に発信できるようにするといいなと思いました。

○原田委員長 まさに、そのとおりだと思います。

○林委員 委員長に初めて反論しますけれども、アニマルファミリーは、ほかの動物はそうであっていいと思うのですが、ゾウに関しては、今の鈴木委員の話もそうですけれども、この前、放送したものの中でも、円山の飼育員の人たちは非常にすばらしいと言っていたのですが、飼育員が「市民から動物をお預かりしていますから」と言うのです。放送局の

編集する者も普通はそれを切るのですが、切らなかったのです。それは、記者がこの動物園をすごく愛している理解しているということもあるのですが、このフレーズは絶対に切らないぞと思って、付けてくれたのです。よくやったと私は思います。

いわゆる税金によって動物園が成り立って、その中に深くかかわっているということを飼育員から我々の放送によって、あるいは新聞によって知らされる。これまで、実はマスコミも怠慢だったかもしれないと思ったのです。つまり、市民からお預かりしている動物なのだということを飼育員が必ず言う。これは、園長の徹底なのかどうか分かりませんが、動物園の動物とそれを守る人と市民とを結びつけ、意識を高めるすばらしいことだと思います。

そのことから言えば、ゾウはみんなの税金で買ってもらうべきで、だから議論をすべきで、出来れば導入するというくらい夢のある札幌市になりたい。そのために、喧々譁々やって、だからどうしようかといって、税金を増やそうとは言わないでしょうけれども、子どもたちのためにも動物で夢のあるまちをつくろうというくらいの議論をする。そういうことができたときに初めて、動物園が果たす市の役割が広がってくると思いますし、子どもの教育とか福祉というものにも広がってくると思います。福祉のことを福祉の人が語るということはよくありますが、違う面から語って初めて、それはみんな深くかかわっているのだと思い知らされるのがよくあると思うのです。

僕は、飼育員の方々がそう言って、それをカットしなかったという偶然が重なって放送になった。それも2回繰り返したのです。私は非常に心に響きました。

それは、マスコミの僕らの怠慢だったなど。自分もずっと取材をしに来ていて、そういう飼育員がいたかもしれないのに、僕は、そんな話は聞いてなかったんだな、動物が今元気かどうか、人が来るかどうかなんだよということで取材してしまったかもしれません。しかし、経営のことなどをテーマにしましたから、当然、そこにはそういう思いがなければ出来ないといったときに、その言葉を落とすわけにはいかなかったのです。それに何かヒントがあるのかなと思います。

私は、委員長の話を聞いていて、ゾウだけはやっぱり税金でいこうよという気がしました。そのために、みんなが命を考えていく、それは同じ思想だと思うのです。

○原田委員長 私は、先に言うのか、後に言うのかということで、結局は税金で買うんですよ。そうなのですから、今の55万人という人は、550万の10分の1ではないのです。ファミリーというのは家族ですから3.5人くらいいますね。だから、55万人いても、ファミリーになれるのはその3.5分の1なのです。そういうふうに考えていきますと、そんなにたやすくは負担出来ないということです。そこで、戦略的に市は子どもの環境教育のためにどうしても、環境教育と言うとちょっと固いので、それだけではなく、夢を育てるということも含めて議会を通してこれを決定しますね。決定するのだけでも、それを今度はファミリー募集にかけて、何とか、えさ代を頼みますよと。それは後からなのです。つまり、先に言うのか、後で言うのかということで、結果的には同じよう

なことになると思います。

私は、資金繰りのためにこれを分譲でということをお願いしているわけではなくて、まさにお預かりしている動物をとという趣旨です。これが、リスタート委員会で決定して非常に大きなコンセプトだと私は思っております。

そういう意味で、林委員とはイメージは違っていないと思います。

ほかに、言いそびれたことなどはありますか。

○服部副委員長 今、林委員と委員長の話を聞いている中でも、基本構想、基本計画をつくり上げていく中で、親子の絆という点が職員の皆さんにしっかり浸透してきていると思うのです。まさに、委員の皆さんの成果が出てきているのだろうと思うのです。今の親子の絆という点をとらえていくと、複数頭のゾウがファミリーで遊んでいる姿、生きている姿を見るというのは、確かに福祉教育につながりますし、人間教育につながってくる大きなテーマの一つだろうと思います。

そういう意味では、ゾウ導入の夢のシナリオというものを親切に作っていただきましたけれども、やはり市民が決めることですから、ただ、市民が決められるような情報を事細かに伝えなければならないと思います。軽々にただアンケートをすればいいということではなくて、こういう理念に基づいてゾウを導入すべきかどうかということを選択してもらおう。

これは最後だろうと思います。これで市民アンケートを取ってどうするかというよりも、市民アンケートというのは一つの手段であって目的ではないだろうと思います。先ほど、札幌円山動物園のグランドデザインと申し上げましたけれども、10年後、20年後、30年後ということで、基本計画が出来上がって、そのとおりに進んできている、ましてや、今年は70万人の入園舎を突破するだろうといううれしいお話を伺いました。来年には100万人も夢ではないです。

それは、100万人が達成されたとすれば、動物園のある種の位置づけは理解され、認識され、そしてファミリー化されたというふうにとらえられるのではないかと思います。そうすると、いよいよ何が必要かということ、理念に基づいた、あるいは目的に基づいた形づくりをしていかなければいけない、その上でのゾウだろうと思います。

そういう意味では、この場だけではなくて、さらにディスカッションの場を持ちながら、委員会としてはある種の意見をまとめなければならないと強く感じています。そういう意味で、夢のある結論づけができればいいのかなと思います。

○原田委員長 ありがとうございます。

今、結論というお話が出ましたけれども、私としては、今日、委員からいろいろな意見が出されましたが、こういうディスカッションをまだまだ重ねていくことが大事なのかなというのが結論のような気がしています。ですから、今日のところで結論というのはちょっと早いと思います。来年、意見収集をするようでございますので、アンケートという形ではなくて、意見を言えるような集會を、いろいろな地区から、いろいろな立場の方々を

お呼びして、動物園でやったらどうなのかなと思います。わいわいがやがやとですね。その方が臨場感もあっていいのではないかという感じがします。そこで言いたいことを言っていたら、こういう視点もあるのかと。今日も、ほんの短い時間ですが、随分いろいろな視点が提示されたように思いますので、もっとほかの動物愛好の仕方をしていらっしゃる方もいるはずですし、環境保全ということを一生懸命考えている方もいらっしゃるわけですから、広いところで意見を集めるという生きたディスカッションの場をつくってもらえるといいと思います。

○服部副委員長 あのゾウ舎の中にみんなで入ってディスカッションをして、それを園に来た人たちに見てもらおう。

○林委員 それはいいかもしれません。それは絵になりますね。

○服部副委員長 あそこで何かイベントをやったらいいのになと思っていました。

○鈴木委員 私は法学部なのですが、裁判員制度が導入されますね。大変評判が悪いのですけれども、1回、模擬裁判に参加したり、話を聞いてくると、学生がころっと、いいと思うと言うのですね。

アンケートというのは、設問の仕方が難しいと思うのです。どういう結果を得たいかによって調査のやり方が変わってくるところがあって、難しいところがありますけれども、おっしゃるとおり、臨場感のあるところで、林委員が雪の中のゾウを見て感動したお話などをなさるとか、そういうことが判断には非常に必要だと思います。

○原田委員長 それを雪の上でやれということですか。

○いがらし委員 感動する話とか、泣ける話とか、泣ける歌があるじゃないですか。あれで、花子のためにみんなハンカチを持ってきて……。

○金澤園長 骨格標本の前でやったらいいでしょうか。

○鈴木委員 先ほどから財政のことで、もっと材料をという話があります。私は、お金については非常に弱いので、幾らかかると言われても、だから大丈夫だ、大丈夫ではないという判断ができないわけです。長期的にペイしていけるのか、何かほかのところに影響が及ばないのかということですね。金額よりも、そういった情報の方が重要です。30億円かかりますと言われても、それを市が出してくれるようにしてくれるためにはどういう理由づけが必要で、見通しがあるのかどうか、その後の人件費はどうなっていくのか、そういう方が重要なような気がします。

○服部副委員長 その点からいくと、一つ考えておかなければならないのは、旭山動物園は200万人、そして300万人とふえていくと思いますが、そういう見せる動物園でいいのか。やはり、円山動物園らしさを明確にしておく必要性があります。私は、100万人を達成すれば、円山動物園をみんなで一生懸命頑張って職員が一丸となって、イベントをやったり、夜遅くまでいろいろな仕事をしたりして、努力の積み重ねによって100万人というものがもう目の前にぶら下がってきています。これは、園長以下、職員の皆さん方に拍手を送りたい一つの出来事になるだろうと思います。しかし、これが200万人、

300万人を目指すのかということ、そうではないだろうと私は思うのです。そうすると、費用対効果、いわゆる収益性からいくと、ゾウが来たら収益性は悪化しますね。これは目に見えています。しかし、そうではなくて、円山動物園のランドデザインとしての位置づけの中に必要性のある円山動物園を描いていくとすれば、それは議会を通ることになるでしょうし、市民にも理解していただけるものになるのではないかと思います。そういうものをみんなで描いていくことが大切だろうと思います。

そういう意味で、私は、林委員が先ほどおっしゃったように、円山動物園らしい動物園づくりは絶対に欠かすことができない。これをなくしては、ただの動物園ですから、そこを忘れてはいけないと思います。

○原田委員長 それでは、ゾウの導入という話題については、大体以上のようなことで、あえて導入すべし、必要なしの結論づけないでおきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○金澤園長 はい。

○原田委員長 委員の皆さんもよろしいですね。

(「異議なし」と発言する者あり)

○原田委員長 それでは、次に入りたいと思います。

ゾウの導入については、今、いろいろ意見が出されたところですが、この近況報告全般にわたって、現在、基本計画が進行中という段階に入っている1年目を迎えているわけですが、基本構想等で提案された内容がきちんと実行に移されているのかどうかということについて、この市民動物園会議としては意見を出しておくべきではなかろうかと思いますが、委員の皆さんから、ゾウ問題だけではなく、ほかの事柄についても出していただきたいと思います。先ほどはオオカミ舎について良くなったというお話がございましたけれども、ほかの事柄について何かご意見がありましたらいただきたいと思います。

いかがでしょうか。

○須藤委員 今日、ちょっと早目に来て動物園を見て回って気づいたことですが、道しるべになっているサインにはしっかり英語が書いてあるのですが、ポスターなり説明なりの英語の部分はデザインとしての英語になっているのです。たまたま今日、香港からツアーで来ている人たちが来て、そういう方にも私の拙い英語で伺ってみたのですが、パンフレットにしても英語版がないのです。香港の方は日本語と同じような漢字を使うので、漢字を見れば何となく分かるのだけれども、香港は英語ですね。台湾とか上海からいらっしゃる方もいるようなので、最低限、英語での説明も必要ではないかと思います。サミットもやったことですし、観光都市でもありますからね。やはり、札幌に来たら円山動物園に来たいという動物園になっていただきたいということを考えても、それは必須ではないかと思えます。

今、自分がどこにいるのか、何となくは分かるのだけれども、日本語を読めないから、今、私はどこにいるのですかと聞かれるのです。地図を見せて、ここにいますよという感

じで説明をするのですけれどもね。

まず、パンフレットから始まって、ゾウの問題にしても、今、円山動物園はこういう問題を抱えていますということ、日本人だけではなくて、外国の方にも知っていただいていたと思うのです。

英語版はあるのですか。

○原委員 地図はありますよね。

○金澤園長 あります。あるのですが、一、二年前の絵になっています。

○服部副委員長 ちなみに、外国の方々の入園者は年間どのくらいのですか。

○金澤園長 数はとっていないです。外国の方はツアーで入ってきているのですが、それを団体でどうのこうのという手続を先にされていないので、一般のお客さんと同じカウンターの仕方になってしまうのです。

ただ、最近聞いていますと、中国語、韓国語、ロシア語が多いです。

○服部副委員長 先般、上田市長と横内頭取とのディスカッションの中で、中国からたくさん受け入れていこうと。観光札幌を打ち出していこうというメッセージが送られました。そういう意味では、中国語、あるいは韓国語、そして英語というのはこれからの時代に必要なレベルなのかなという感じがします。同時に、もっと外国へ発信する努力も、ある種、必要なのかなという感じがします。今、須藤委員がとてもいいことをおっしゃっていただきましたけれども、外国人を受け入れる観光、札幌市というものがこれだけことをやっているのだ、環境都市としてこれだけのものをつくり上げようとしているのだというメッセージを送れる、これも一つの大きな目玉だと思うのです。ですから、環境が観光になるかということ、それは大いになるのではないかと思います。そういうレベルでの発信の努力もこれからしていく必要があると思います。これが基本計画の中に入っていたかどうか私も忘れましたがけれども……。

○金澤園長 基本構想の中に入っていました。ホームページは英、中、韓にはしてあります。

○原委員 ぜひ、パンフレットは、2年前のものではなく、新しいものを作っていただきたいと思います。

それは大変なのでしょうか。

実は、今年もそうだったのですが、これから冬にかけて、雪まつり前後は外国の方の入場がすごく多かったのです。ですから、今のお話を伺ってもそうなのですが、入園するときに、パンフレットが選びやすい状況ではなかったのかなという気がしたので、自分に合ったパンフレットを持てるようにということはすぐにでも進めてほしいと思います。

○服部副委員長 もう一つは、パンフレットというのは多少の費用と時間がかかるわけですが、時間がかからないのはボランティアです。留学生のボランティアを大いに活用すると、あの方々が日本の文化を持って帰るのです。そうした時に、息の長い時間空間を通るわけですが、円山動物園でこんなボランティアをしました、こんな思い出もつくりました

ということが必ず出てくるのです。富裕層が日本に押し寄せてくるわけですから、そういう意味では、留学生を活用したボランティアを求めていくようなスタイルが必要なのかなと思います。そうすると、パンフレットも何もないのです。園内を案内してくれるわけですからね。そんなことも一つの方法かなと感じました。

○須藤委員 基本構想から外れてしまうかもしれませんが、前回、私はお休みをさせていただいて、議事録を拝見させていただいたところ、ボランティアの説明のことがありました。私は説明のガイドを受けたことがないので、円山動物園のボランティアのあり方が分からないのですが、何かガイドラインがあるのですか。

また、動物園とのかかわりというか、動物園の中の一つの団体なのか、それとも、動物園を応援するNPO法人のような団体なのかということですが私は分からないのです。

○金澤園長 動物園がボランティアとして募集して作っている任意の会なのです。どちらかということ、今、動物園に110人くらいいるのでしょうか。その中で月何回という出番が決まっているので、その中でローテーションで来ているのです。正直に言って、全然来ない人もいますが、数は110人くらいいるのです。

その方を最初に募集したときに、約3カ月間くらい、週1回か2回くらいのペースで、動物園とはどんなところか、動物というのはどんな動物かという基礎教育はやります。その時点で、本当にボランティアとして登録するかどうかの判断をもらいます。これなら付いていけないといったらそれはいいし、やれるよという方だけ登録していただくのです。そういう方を毎年更新していくのですが、110人なのです。

動物園の主導的な動きが強いのか、NPOという自立したものが強いのかということ、まだ動物園に頼っているような状態です。そして、時々、自分たちは自分たちでやるよと。そんなことをやっている最中です。

本当は、自立して、外部の組織として動物園を応援するよという形になっていくと、もっと別のボランティアの活動の仕方が出てくるとは思いますが、今のところ、まだという状況です。

110人の方が、最低、1日5人くらいは出てきて、園内で団体の方ですね。極力、事前に申し込みをして団体を解説して歩くのと、その場所に立っていてスポットで説明するという役を担っています。

○須藤委員 オオカミが絶滅した説明が違うのではないかという話があったようなので、ガイドラインというか、研修制度がどうなっているのかなと思ったのです。

○金澤園長 みんな同じ状態では話していないです。

○須藤委員 自分の思いなどもあるのでしょうけれども……。

○金澤園長 よくあるのは、動物を人間として扱って1人、2人といって説明する人もいれば、動物を1頭、2頭を数えるのですよという人もいて、スタンスが違っているところがあります。

○原委員 私どもボランティアの中では、研修で学んだ内容と間違っことを言わないと

いうことをベースに活動しております。前回の委員会の中で出てきたような、明らかに違うのではないかということと言われたと伺ったのですけれども、それは言葉だけでとらえてしまうと、確かに違った内容ですが、そのときの前後のお話がわからないので、本当に間違っただけを言ったのかというのは、私の中では疑問符で残っています。

○須藤委員 前々回に出席したときに伺いたかった点だったので今回伺ったのですけれども、シカゴの動物園だと、ボランティアの方がお金を払って研修して、登録して、それに対するベネフィットもあるのですけれども、もっとプロ意識があるのです。

ボランティアの人にたくさん来てもらった方がいいと思うのです。それは経済面でもそうですし、そういう人たちから動物園のよさを口伝てに広めていけると思うので、ボランティアの人はたくさんいた方がいいと思うのです。ただ、ボランティアをたくさん募れば募るほどいろいろなトラブルが出てくると思うので、ガイドラインなり研修制度なりが必要ではないかと思うのです。ボランティアというのは、ただで奉仕をする、自分の興味を満たしたいということではなくて、もっとプロ意識というか、お金を払ってでもやりたいことで、自分の生きがいというか、自分の信念を表現する場であると。トラブルがあったら、もうちょっとあり方を変えてもいいのかなと思います。ただ、私はあり方を知らないなので、今、どうなっているのか伺いたいと思ってお話ししたのです。

○原田委員長 それはすごくいいですね。お金を払ってでも資格を取る。そのいろいろな知識は、みんなそういう世界を勉強するのは好きだから知識として取得する。しかし、逆に、ガイドをする時には、見返りもあった方がいいと思うのです。資格がちゃんとあるわけですから、ガイドさんをお付けしましょうか何百円というガイド料が支払われる。そういう形になると、そういう人がどんどん増えていって、ちゃんと資格を取っているわけですから、それなりの知識を持っている。そういうことですね。

○須藤委員 そうですね。あるいは、駐車料金をただにするとか、アニマルファミリー制度でもオリジナルグッズは何%引きとか、形は何でもいいのですけれども、ちゃんと見返りがあって、かつ、誇りを持ってされる。皆さん、誇りを持ってされていると思うのですけれども、さらに勉強していますという印があってもいいし、日本人の検挙な意識からだとちょっと違うかもしれませんが、お金を払ってでも、私はやります、やっていますというのを出していいかなと思います。そういう気持ちを持つと、私の動物園という気持ちをもっと高まってきて、いろいろな人に宣伝すると思います。留学生の人たちも、私はこの資格を持ってやったんだよという思い出の品にもなります。話だけではなくて、ボランティアバッチを持って帰るのでも違うかなと思います。

○原田委員長 すばらしい提案だと思います。

時間があと3分くらいと迫って、もう締めなければいけないのですが、私は一言だけ言っておきたいことがあります。

アニマルファミリー制度ですけれども、先ほど、合計で275件で、合計金額は232万円という説明がありました。これを見ていると、そんなにどんどん増えているわけで

はありませんので、ちょっとすたれてしまうのではないかと、とまってしまおうのではないかと、というおそれを感じるのです。

先ほど、入園者数と入園料のお話がありましたけれども、これを見てみますと、平成17年度で1億3,000万円、18年度で1億6,000万円の入園料ですね。19年度で1億6,700万円です。これだけを見ていると、17年度から18年度については3,000万円くらいのプラスになっていきます。入園者数のところを見ますと、17年度から18年度で3,000万円のプラスを入園料に直すと、49万人から61万人なので、約12万人くらいでしょうか。12万人くらい増えて3,000万円のプラスになっている、そういうことを表していると思うのです。18年度、19年度についてはそんなに伸びていなくて、20年度はかなり伸びているというふうに読めます。それにしても、10万人伸びて3,000万円程度という入園料の増加が見込まれるわけです。

先ほどのアニマルファミリー制度を見てみますと、275件ですから300件、あるいは口数で言うと400口として合計金額が232万円というふうに考えていきますと、これで増やしていくと、かなり驚異的に伸びると思うのです。アニマルファミリー制度の会員を増やしていくことによって、収入が別枠で増えていくのです。入園料に加算して増えていくわけです。

そういうことを考えますと、入園料の増を一生懸命上げていくということも基本的には大事なことです。これは動物との触れ合いを増やしていくという意味で大事なことなのですが、ファミリー制度をもっと活発にすることによって財政をもっと楽にすることができます。今はまだ赤字が続いていると思いますが、これを何とか黒字にまで持っていくためには、入園者数で黒字していくのはなかなか容易なことではないと思うわけです。そこで、アニマル制度の会員数、あるいは口数を増加していく仕組みを何とかして作らなければいけないと私は思っているのです。

そのためには、見返りのサービスが何なのかというところが非常に重要だと思います。この前に実験をしたというお話は委員もご存じだと思いますけれども、オラウータンの弟路郎のブースの中にカメラを仕込んで、モニターの方々を募集して、ファミリーになってもらって、家で観察できるようにしたのです。これが結構人気だったのです。これならいけると思うのです。

今そのホールに画像が映っていますね。ホッキョクグマとトドですね。ああいうものが見えていますけれども、あれを引いているのです。ぜひとも、そういう映像をファミリーに戻してやるというふうにする、話題が話題を呼んで、動物園を見た後でもそれを見られる。そのファミリーになった子は、いつもそれを見ている。早く勉強しろと言われるくらい見ているかもしれませんが、そのうちに友達がやって来て、うちもファミリーになりたいと言い始めて、今度は動物園に一緒に行こうということになって、そういう子たちが動物園に見にくる、そして加入するという仕組みがどんどん展開していくのではないかと、思うのです。

そういう意味で、サービスとして、映像というのは自動化出来るのです。ここがみそだと思うのです。イベントをやるには人手が要りますけれども、ファミリーに対するサービスというのは、自動化された映像を流すだけという仕組みなので、これは非常に効果が大きいのではないかと思います。もう一度、動物園に引っ張り戻す力も持っているし、ファミリーを増やす力も持っているわけです。そして、ファミリー独自のブログを立てていくことによってファミリー同士の会話が可能になります。それを狙ったフィールドとして動物園をお貸しいただいた情報サービスのシステムを導入していただきたいのです。今年度は難しければ来年度の初めからでいいのですけれども、それを実施して、最初はテストでもいいかもしれませんが、その効果を確認させていただきたいと思います。

そんなに費用は掛からないと思うのです。あの映像が出ているくらいですから、これはいけるなと思います。

○林委員 回線料が掛かります。それはチェックした方がいいです。一番の問題は、私どもも動画の配信をしていますけれども、意外と回線料を請求されるのです。つまり、動画の配信をずっとし続けているということは、結局、こっちが負担をしなければいけません。それは、僕が否定しているのではなくて、常にそういうコストが掛かりまして、情報通信も今やっている中で隠れている一番のネックはそこなのです。回線費がすごく掛かって、それを負うために、結局はビジネスになっていないということが起きているのです。ですから、そこは注意深くおやりになって、逆に値段とか、サービスとか、委員長がおっしゃったことは間違いないので、そういうものをうまく使うのがいいと思います。意外と、ふたをあけると、こんなに稼いでいるのに減っているじゃないですかという話になってしまうのです。

○原田委員長 これは、営業的に費用を掛けて見返り幾らというふうにすると、その費用の請求が出てくると思うのですけれども、今、MS LみたいなPC上でやっているものがありますね。私は、毎日のように、結構長く使っているのです。あれは、全くただなのです。ゼロ円です。それが可能なようにやる仕組みを、これは見積もりを必ず取るべきだと思います。そんなのは当たり前ですが、いろいろ比較をされると、事業費がゼロでいけるなと思うのです。

例えば、サーバーのレンタル料はあるかもしれませんが、動画像なので、棟数が多くなってくると、それを切りかえていく仕組みが必要になってくるかもしれませんが、基本的にはそんなに掛からないと私は思っているのです。もし必要なら、費用計算の比較をやられると、即、明快に分かってくると思います。費用が掛からない方法を見つけ出すことが重要だと思います。

○須藤委員 うちの息子は、アメリカのナショナルズのパンダの顔をよく見て、今日も寝ていると。息子が見られる時間はちょうど寝ているのです。今日も寝てる、起きないのかなとよく言っているので、小さい子は好むと思います。

○服部副委員長 もう一つ、それに加えて、アニマルファミリーの会員数が増えているの

か分かりませんが、もっと増やすためには、入会しやすい方法ですね。どうして動物園内での入会を拒否するのか。動物園の中でも入会を受け付けてもいいのではないか。あるいは、なぜ金融機関に持って行くのか、なぜコンビニを使わないのか。そこにセブンイレブンがあります。金融機関まで行って、お金を払って会費を納めて云々というのは、今の時代ではちょっとおくらせています。それより何より、ここでインフォメーションして、ボランティアさんもいらっしゃるわけですから、いろいろな角度の中でアニマルファミリーのメッセージを発信する。

とにかく、この園内で入会受け付けをしてもいいのではないかと私は思うのです。現金を扱うのは大変だということがあるかもしれませんが、その辺の理由は分かりませんが、動物園で直接現金はお受けできませんではなくて、やってもいいのかなという感じがします。

○金澤園長 今の時点でできない理由は明快なのです。実は、これはアニマルファミリーの会費と言いながら、実は寄附なのです。えさ代として寄附していただきますということになっているので、寄附の申出書が必要なのです。役所のルールとしてです。私たちも、最初は服部副委員長が言われたような方法を模索したのです。いきなり郵便振替みたいなものがあって、わっと書いて、ぽんと送ればいいのではないかということまでやったのですが、会計システム上出来ません。そこをクリアできない限り、今のシステムを変えられないのです。

例えば、今はもうないのですけれども、友の会のような団体がきちんとあって、そこがやりとりをして会費制をとるのであれば、それはオーケーです。ただ、動物園として、役所としてやる分にはハードルはすごく高いと思います。

○服部副委員長 ぜひ、その辺を一つの論議の対象にしていかなければいけないと思います。

今、園長がおっしゃったように、アニマルファミリーをどうしても増やさなければいけないとすれば、何らかの形でそういうことをしやすい手段を講じられるような環境をこの委員会としてまとめ上げて提案していくことも大事だと思います。今のままだったら、なぜ動物園で受け付けてくれないのかという素朴な質問がどんどん来るだろうと思います。このファミリー制度が浸透していけばですね。そこにお役所的な部分があるということ、今、明確に教えていただきましたので、よく分かりました。

○井上委員 私は、前回の会議で服部副委員長と同じ質問をして、そういうお答えをいただいたのですが、その辺を改善するのはなかなか難しいのですか。

○服部副委員長 役所としてなかなか言いにくいだろうから私が言いますが、役所の立場からいけば、そういう手続をとらざるを得ないというのがルールでしょうから、それをもっと簡便にしないと、今日に言って、明日直るものではないと思います。簡単に言えば、別の団体でそれを作り上げて行って、別の団体からぽんと動物園に寄附させるという方が早いです。一括にいつてしまった方が早いです。

○**原田委員長** それが早いのだったら、早くやってしまう手もありますね。

○**林委員** おっしゃるように、結局、割とうまくいっている市のシステムというのは、本当に外にあった方がいいと思います。例えば、今の回線の問題をどう改善するか、それは通信の会社とうまくやって提供してもらってということは十分出来るわけです。それで寄附して、それで回線を結ぶとかね。一々、ここでやると、ここで予算を上げて、私はそれで気を使っているわけです。回線費があって、あそこでこうなって、予算が立ち上がったのだけれども、ここで急に言われたからどうするかというと、それは予算の中で乗っけなければいけないと。今、委員長はそれを分かっているとおっしゃったと思うのですが、予算もうつくり上がって終わってしまっているはずですから、その中でどうするか。

だから、役所は本当に大変なのですよ。自分たちがその思いを持っていても、一回決まってしまったことについては使えないのです。それこそ、流用という言葉になってしまいますから、目的以外のことに使うことが出来ない、それを修正変更出来ないというルールなのです。それは、どこの国でも同じだと思います。そういう意味では、今おっしゃられたシステムの方がいいかもしれませんね。

ただ、問題は、それを管理する人は誰か、誰がどうするかとなると、またその人件費がかかって、マイナスになるからそれ以上は言えないなど。ですから、ボランティアの方がそういうことをやって、何とか会を作られるとか、青年会議所の方が応援をするという形でやった方が、市民レベルでフットワークの軽い動きが出来るかもしれません。

○**原田委員長** いいですね。林委員が出来そうな感じですね。

○**林委員** 私が卒業したらできるかもしれません。

○**金澤園長** 会社というか、NPO法人でもいいし、何かの形の法人格を持ったところがあると、フットワークは絶対にいいと思います。

○**服部副委員長** 手っ取り早いのは、企業、市民に問いかけていって、作り上げてしまう。全市の企業に参画してもらって、基金をつくる、そのようなシステムを作ってしまった方が、早いことは早いと思います。今、企業は社会貢献というレベルを位置づけていこうとしていますし、また、そうしていかなければならない時代に入っていきます。企業経営に対する教育もしていかなければならないわけですが、そういう制度に乗っていくのもありかなという感じがします。

いずれにしても、何らかの形をとらないと、現況のままのアニマルファミリーの入会システムでは伸びないと私は思います。

○**原田委員長** 少し時間がオーバーいたしましたので、まだいろいろ残された課題がありそうですが、また次の機会にお話しいただくことにしまして、今日のところはこれで閉めたいと思います。

では、次回議題と日程調整について、お願いします。

○**金澤園長** 次回は、20年度の総括ということで、3月上旬くらいで調整させていただきたいと思っています。改めて、日程調整をさせていただきたいと思っています。

3. 閉 会

○**原田委員長** それでは、第5回市民会議を終了したいと思います。

皆様、どうぞよいお年をお迎えくださいませ。

ありがとうございました。

以 上→